

P-275 妊娠中期の子宮動脈血流速度波形における拡張早期notchを用いた妊娠中毒症及びSFDの発症予知に関する検討

富山県立中央病院母子医療センター産婦人科
大口昭英, 森 秀美, 中島正雄, 石川博士,
飴谷由佳, 佐竹紳一郎, 小嶋康夫, 舟本 寛
中野 隆, 館野政也

【目的】妊娠中期に施行した子宮動脈血流速度波形における拡張早期notchの有無と妊娠中毒症及びSFD（出生体重の10%未満）の発症との関係を検討すること。

【方法】1993年4月より1995年12月まで、妊娠16週から24週の単胎妊娠229例を対象に子宮動脈血流速度波形の計測を行った。血流の測定は、外腸骨動脈と子宮動脈が交差する部位で行い、3心拍以上にわたり、明らかな拡張早期のくぼみを認める場合をnotch陽性とした。229例中21例は里帰り分娩のため追跡が不能であった。また、2例は妊娠24週未満において出生したため、SFDの検討から除外した。解析は、SPSSを用いて χ^2 検定を行い、危険率5%未満を有意差ありと判定した。

【成績】追跡の結果、notchがみられなかった群（171例）からは2例（1.2%）が妊娠中毒症を発症した。片側のnotchがみられた群（16例）からは1例（6.3%）、両側のnotchがみられた群（21例）からは3例（14.3%）が妊娠中毒症を発症した（ $p=0.002$ ）。妊娠中毒症の分類は、いずれも重症であった。notch陽性の場合、妊娠中毒症発症の相対危険度は9.0倍であった。

一方、SFDの発症に関しては、notchのみられなかった群（169例）からは5例（3.0%）がSFDを発症した。片側のnotchがみられた群（16例）からは2例（12.5%）、両側のnotchがみられた群（21例）からは4例（19.0%）がSFDを発症した（ $p=0.003$ ）。notch陽性の場合、SFD発症の相対危険度は5.5倍であった。

【結論】妊娠中期の子宮動脈血流速度波形におけるnotchの存在は、妊娠中毒症及びSFDの発症予知に有用な所見と思われる。

P-276 性ホルモンと体内ビタミンK濃度

聖マリアンナ医大
北條めぐみ, 大塚博光, 安 肇, 中田洋子, 渡辺知緒,
会沢芳樹, 荻原哲夫, 雨宮 章

【目的】ビタミンKは体内に広く分布し、多くは肝組織に集積する。肝はビタミンKの作用発現の場と考えられている。我々は経母体的に投与されたビタミンKが胎児に良好に移行する事を確認しさらに肝組織中のビタミンK濃度に性差があることを報告してきた。そこで今回は性ホルモンが肝組織中のビタミンK濃度にいかに影響を与えるかを検討したので報告する。【方法】Wistar-Imamichi 雌ラットを3週齢で去勢しエストロゲン投与群(E群)-100 μ g/rat $\cdot$ week sc(n=5), エストロゲン+プロゲステロン投与群(EP群)-E:10 μ g/rat $\cdot$ week + P:1mg/rat $\cdot$ week sc(n=5), テストステロン投与群(T群)-1mg/rat $\cdot$ week sc(n=5)の3群を作成し、6,9,12週齢で肝組織を採取し、HPLC法でMK-4濃度を測定した。そして3週齢で去勢し、ホルモンを投与しないものをcontrol群とした。【成績】E群では、6週齢で 9.68 ± 1.81 (mean $\pm$ sd, ng/g), 9週齢で 7.88 ± 0.98 , 12週齢で 5.31 ± 0.79 であった。EP群では、6週齢で 8.40 ± 1.37 , 9週齢で 7.15 ± 0.88 , 12週齢で 4.71 ± 0.41 であった。またT群では、6週齢で 5.09 ± 0.93 , 9週齢で 3.00 ± 0.38 , 12週齢で 1.73 ± 0.27 であった。一方control群では、6週齢で 7.89 ± 1.66 , 9週齢で 5.13 ± 0.78 , 12週齢で 3.69 ± 0.40 であった。各群間では、6週齢で、T群は、control, E, EP群に比し有意に低値となった。そして9,12週齢ではE, EP群は、control群に比し有意に高値をとり、T群はcontrol群に比し有意に低値を示した。【結論】雌ラット肝組織中ビタミンK濃度は、性成熟に伴い上昇し、雄ラットでは低下した。これは性ホルモンが肝組織中ビタミンK濃度に作用した結果であると思われたが、今回の結果よりエストロゲン、プロゲステロンは、肝組織中ビタミンK濃度に促進的に作用し、テストステロンは抑制的に作用していることが確認できた。